

# 羅振玉より徳富蘇峰への手紙 ——同志社大学図書館蔵『羅振玉書簡・徳富猪一郎宛』略注（下）

道坂 昭廣

「羅振玉より徳富蘇峰への手紙 ー同志社大学図書館蔵『羅振玉書簡・徳富猪一郎宛』略注（上）」（前稿と称する）に続き、全十四通の手紙のうち、後半6通について、文字を釈し、簡略な注と訳を附す。

この手紙は同志社大学図書館に所蔵されており、デジタルアーカイブの一として公開されている。

<https://library.doshisha.ac.jp/ir/digital/archive/rashingyoku/194/imgidx194.html>

一九一七年から一八年にかけて発信されたこれら六通は、蘇峰の中国（朝鮮半島から中国）旅行を契機とする。今回の最初の一通（第九信）は、中国旅行に際し、蘇峰が羅振玉に知り合いの紹介を依頼したことに対する返信であったと考えられる。羅振玉は蘇峰の行程にあわせて中国に一時帰国し、王国維とともに上海で蘇峰と会っている。第十信以降はすべて、足利学校蔵『礼記正義』に関わる。蘇峰は、羅振玉の紹介により、上海で劉承幹に会い、嘉業堂を見学した。この後、

劉承幹は足利学校蔵『礼記正義』を影印しようとし、羅振玉を通して蘇峰に撮影の仲介を依頼してきたのだ。残念ながらこのことは実現しなかったものの、嘉業堂の出版活動の一端をうかがうことができる貴重な資料と思われる。

今回紹介する第九信から第十四信は、消印や羅振玉が記入している日付から考えると、同志社大学図書館蔵巻は繋ぎ方に乱れがあるようである。発信順に並べると以下ようになる。

- ・一九一七（大正六）年九月六日 旧曆七月二十日発信……第九信
- ・蘇峰の朝鮮半島・中国旅行直前、紹介状の同封
- ・一九一八（大正七）年二月十二日 旧曆一月二日発信……第十信
- ・劉承幹（嘉業堂）から足利学校『礼記正義』影印の希望があり、羅振玉が蘇峰に紹介を依頼。
- ・一九一八（大正七）年二月十九日 旧曆一月九日発信……第十二信
- ・足利学校蔵本影印許可の礼、及び撮影方法について

・一九一八（大正七）年二月二十日 旧曆一月十日発信……第十一信  
足利学校蔵『礼記正義』の版本について問い合わせ。

・一九一八（大正七）年三月十四日 旧曆二月二日発信……第十四信

\*封筒無し。羅振玉の記述より推定。

写真家、小林忠治郎の紹介。

・一九一八（大正七）年三月三十日 旧曆二月十八日発信……第十三信

足利学校側の撮影中止命令に対する、問い合わせ。

なお本稿では、同志社大学図書館蔵巻の張り継ぎの順に従った。前

稿と同じく、「」は小字、■は私が全く読めなかつた文字を示す。

また『羅雪堂合集』所収の蕭立文氏釈字を参考にした。

### 第9信

消印 (大正) 6年9月6日 京都 \*西曆一九一七年

(大正) 6年9月7日 青山

東京青山南町六ノ三十番

徳富猪一郎 殿

台啓

羅叔言

蘇峯先生閣下奉  
手教敬悉

從者將有弊國之行。假裝待發、

令介紹〔弟〕之知舊。〔弟〕去國以來、与近時執政諸

人不通書問、所通往還者、惟學術家及收藏

家耳。茲作介紹書三通。祈

檢入。天津方君曾至海東、或与

先生舊識。此君交游至廣、凡津京間

先生欲見之人、〔弟〕已託彼、轉為介紹。上海鄭君

亦曾至

貴國、与

〔曾任邊防大臣、詩古文甚工、明悉政治〕

貴邦 名宿交遊至多。劉君則藏書甚富、近

日刊刻古籍不少。

先生得晤、可一觀其書庫、劉君定歡迎也。專此敬

復、即頌

行祉。維

行李慎重、不盡欲言。〔弟〕振玉再拜七月廿日

外信三封名刺三紙。

蘇峯先生 お手紙を拝受いたしました。私は（先生が）我が国へ行かれるにあたり、旅装を整え出発を待っております（1）。私の旧知の者を紹介せよとのことですが、私は（辛亥の年に）国を出て以来、この頃の政治を行う人々と連絡を取っておりません。手紙のやりとりをしているのは、ただ学者と所蔵家だけです。いま紹介状三通を作り

ました。ご査取下さい。天津の方君(2)は、以前日本に来たことがあり、或いは先生と面識があるかもしれません。この人は交友が大変広く、天津北京方面で先生が会いたいと思う人がいらつしやいましたら、彼に連絡しておきましたので、紹介してくれることでしょう。上海の鄭君(3)もまた貴国に来たことがあり、貴国の声誉ある人々との交際が大変多い人物です〔彼は以前辺防大臣に任ぜられたことがあり、詩文に優れ、政治にも通暁しています〕(4)。劉君(5)は蔵書が大変豊かであり、また古籍の復刻を盛んに行っています。先生はお会いになり、その書庫を見学なさってはいかがでしょうか、劉君はきつと歓迎するでしょう。返信を差し上げます。御旅行お気をつけて、言葉に尽くせん。七月二十日(新暦では一九一七年九月六日) 別三通の紹介状と名刺を三枚同封します。

注

徳富蘇峰は大正六年九月十五日から十二月九日まで、朝鮮半島から中国を旅行した。この旅行はのちに『支那漫遊記』として大正七年六月二十五日に民友社より刊行され、その後小島晋治監修『大正 中国見聞録集成』第六卷(ゆまに書房 平成十四年四月)に復刻されている。以下本稿では『漫遊記』と表記する。

(1) 假装待發 この年、羅振玉は一時期上海に戻っているが、具体的な帰国の日時については、分からない。彼の年譜(『永豊郷人行年録』)には「冬、郷人再至滬」とだけあり、具体的な日時を記さない。『羅

振玉王国維往来書信』(東方出版社 二〇〇〇年)所収の十一月十四日の羅振玉の手紙(三九九)を見ると、この時点ではまだ日本にいたようである。なお次の十二月四日(四〇〇)は、「在滬拜教、復荷遠送江干」の文字があり、上海より日本に戻っていたことが分かる。蘇峰『漫遊記』十一月廿二日には、前日の嘉業堂訪問の同行者として「數日前京都より還れる羅振玉翁……」と紹介することなどを考えると、羅振玉が上海に向かったのは十一月十四日以降二十一日以前と思われる、この手紙発送後すぐではないようである。

(2) 天津方君 『漫遊記』によると、水害に見舞われた天津に滞在することなく、蘇峰は秦皇島より北京に直行している。北京滞在中の記録にも方姓の人物は出てこない。羅振玉と交際があった方姓の間で、この時期天津におり、学者、収蔵家という条件に合致する者として、『校碑隨筆』などの著述があり、古銭の収集研究で有名な方若(一八六九—一九五四)がいる。彼は光緒年間、西太后の政治に反対したため日本に逃れていた時期がある。

(3) 上海鄭君 鄭孝胥(一八六〇—一九三八)。鄭孝胥は清光緒帝時期、外務官僚として日本に駐在していた時期がある。そのため、日本人の知り合いは多いようである。

(4) 名宿の横に小字で書き加えられているこの部分を、『羅雪堂合集』は「至多」の後に繋ぐ。鄭孝胥は、清光緒時期、張之洞に見出され広西辺防督弁となっている。また保守派の政治家として、光緒時期に活動するが、民国初期のこの時期は上海で隠棲していた。

(5) 劉君 劉承幹(一八八二—一九六三)。号翰怡。羅振玉が紹介す

るように嘉業堂の名で知られる蔵書家。

『漫遊記』によると蘇峰は十一月十一日上海に到着。十七日から十九日の杭州遊覧後、再び上海に戻る。十一月二十一日、正金銀行児玉氏宅にて昼食後、鄭孝胥を訪問した。「鄭孝胥氏を訪ふ。氏亦た復辟派の一人也」とのみ記録されているだけで、その後訪問した李鴻章の子、李経邁の記録が詳細であるのに対し、簡略である。一方、鄭孝胥も、その日記『鄭孝胥日記』（中国歴史博物館編・勞祖德整理 中華書局 一九九三年）が残っている。それによると、一九一七年十一月十五日（旧暦十月一日）「友永來約明日至六三園、乃三井之藤村宴日本國民新聞社社長德富蘇峰于彼……余以有事辭之」とある。さらに十一月十七日、「德富蘇峰交來羅叔蘊紹介書、約廿一号即初七日午後二時來談」とあり、蘇峰の記事に符合するとともに、羅振玉が紹介状を書いたことがわかる。ただ十一月二十一日の日記は、「德富蘇峰、西本省三同來」とだけ記録される。

『漫遊記』では鄭孝胥を尋ねたその日、十一月二十一日に以下のよくな記録がある。長いが引用する。「更に前約を趁ひ、劉承幹氏を訪ふ。氏の嘉惠堂文庫は、今や宋元の舊槧、明清の古鈔、あらゆる珍籍を以て、一方に雄視せり。予は僅かに其の一斑を瞥見したるも、實に自から好書癖を、悔いざらんとするも能はざる也。氏は單に蒐集家のみならず、亦た資を投じて、其の藏書を刻し、後學に嘉惠する所少からず。會者は主人を始め、數日前京都より還れる羅振玉翁、及び王國維、蔣汝藻、張增熙、葛昌楨、何れも浙江出身者にして、皆な好古の士也。

晚餐卓上語る所、概ね風雅の事のみ、予は劉氏の文庫に、數時を費して、數月を費す能はざるを憾みとす。還るに際し、氏は其の刻書數種を贈れり。以上は「大正六年十一月廿二日午前六時 上海に於て」とされる記事で、翌日の記事でもまた劉承幹の嘉業堂の蔵書について記録する。

劉承幹は『求恕齋日記』を残しており、そこには羅振玉との書信の往復や書籍の贈答が記録されている。例えば前稿で紹介した『吉石庵叢書』なども羅振玉より彼に贈られている（一九一七年一月三日）。また蘇峰の訪問については、同年十月五日に、「晚張硯孫來、囑其寫一函復日本人德富蘇峰、約其初七來看書、并邀其晚膳。（伊來函附有羅叔蘊紹介書）」とあり、羅振玉が紹介書を作成していたことが明らかになる。そして七日には、「日本人德富蘇峰、（名猪一郎、乃彼國之貴族院議員、國民新聞社長）、西本省三（……）已來、遂邀至書房內看宋版書。未幾、羅叔蘊、王靜安、……先後來、弁群帶碑帖數冊來、亦展翫良久。七時宴諸君於嘉業堂、散後二日本人先去、叔蘊、靜安諸君略談至十時而去」とある。続いて同月十四日には、「西本省三送到石印影宋本『淮海拿音』『寒山詩集』『陸天錫逸詩』『日本書記』、乃德富蘇峰囑其贈與予也」という記録がある。

なお同時期、内藤湖南も上海にあり、王國維の案内で彼の蔵書を閲覧している。

## 第10信

消印 (大正) 7年2月12日 聖護院 \*西曆一九一八年

東京市赤坂区青山南町六ノ卅

徳富猪一郎殿

台啓

羅叔言

蘇峯先生閣下在滬拜

教、忽已逾歲。比維

興居休勝、定如私祝、茲啓者、劉君翰怡

前、面求

影照足利學校宋槧《禮記》單疏、已荷

允為紹介、昨函來託〔弟〕、再申前請、特代陳

左右、能即、

〔如允影寫、々々之費、由〔弟〕奉寄、或〔弟〕遣人影照均可。並祈

示遵〕

俯賜紹介、俾早日寫影、使宋槧得再行于人間。拜

先生之惠不淺矣。專此奉申、春寒尚厲。祈

加餐珍重。此請

著安。〔弟〕振玉再拜 正月二日

蘇峯先生、上海でお教えを仰いでから、たちまち年を越えてしまい

ました。お健やかにお過ごしのことと存じます。この度お手紙を致しましたのは劉翰怡君が先にお目にかかったときに足利学校の宋刻『礼記』單疏本(1)の写真撮影について紹介をお願いしておりましたが、昨日手紙でお願いしてきました(2)。あらためてお願いを致します(もし撮影が許されましたら、撮影の費用は、私よりお送りいたします、或いは私が人を派遣して撮影させるということも可能です。ご指示に従います)(3)、どうか紹介をいただきまして、早く撮影を行い、宋版を再び社会に公開させるため、先生のお力添えを切に願っております。以上要件のみ申し上げます。春とはいえ寒さ厳しきおり、どうかご自愛下さい。

〔弟〕振玉再拜 正月二日(新曆では二月十二日)

注

(1) 足利学校宋槧『礼記』 国宝。『礼記正義』七十卷 宋紹興三年刊本。半葉八行、行十六字から十九字、注文小字双行、白口、単黒魚尾、版心に「禮記義幾」。一部室町時代の補写がある。『足利学校貴重書目録』によると、『禮記正義』全三十五冊 宋版、紹興三年刊每冊「足利學校公用」「上杉安房守藤原憲實寄進華押」「松竹清風」の印ありとある。またこの書巻末には「紹熙」壬子秋八月三山黃唐の跋文がある。この書は、現存最古の足利学校の蔵書目録とされる(川瀬一馬『足利学校の研究』(昭和二十三年 大日本雄弁会講談社)による)、『足利学校蔵書目録』(享保十年(一七二五))に既に著録される。山井鼎が『七経孟子考文』で利用し、森立之『経籍訪書志』も記録して

おり、その存在は中国でも知られていた。ただ、後にあるように、単疏本ではない。なお張麗娟『宋代經書注疏刊刻研究』（北京大学出版社 二〇一三年）に「二十世紀初劉氏嘉業堂陸統翻刻單疏本、存世宋刻單疏本亦漸統得到影印出版、單疏本始較多為人所知」（二二九頁）と紹介するように、羅振玉のこの手紙もこのような劉承幹の熱心な影印活動の一環とすることができる。内容について記述はないものの、劉承幹の日記には、羅振玉との手紙の往来が何度か見える。

(2) 再申前請 劉承幹は嘉業堂叢書の一として刊行した『禮記正義殘本』（一九一四年）の跋文に「從東洋舊卷影寫、惟宋七十卷本、昔藏盛百熙祭酒許、今已散出、不能借校、殊憾事。不但阮氏刻注疏時不見、即經籍訪古志亦未真、屬秘笈。余刻五經單疏、此亦聊備一種」と、この書を見ることが出来ないことを残念に思っていたことがわかる。

(3) 小字で書き加えられたこの部分を、『合集』は「不淺矣」の後に繋ぐ。

### 第11信（第12信）

消印（大正） 7年2月20日 聖護院

（大正） 7年2月21日 青山

東京市青山南町六ノ三十

徳富蘇峯先生 台啓

羅叔言寄初十日

蘇峯先生有道、昨函計達

左右。昨晤内藤博士、渠言足利學校本《禮記正義》

非單疏本。尚求

函足利君一調査、若非單疏、乃合經注本、請

暫緩照影。（弟）再函劉君、詢明照否。祈

略示照費若干、一並告劉君。種々費

神。即請

著安。（弟）振玉再拜初十日

蘇峯先生 昨日の手紙は恐らくお受け取りいただいたことかと思ひます。昨日内藤（湖南）博士（一）にお会いしたところ、彼が言うには足利學校所藏『禮記正義』は單疏本ではないとのことでした。そこで足利君（學校）に手紙を出し調査をお願いしたいのです。もし單疏本ではなく合經注本なら、しばらく写真撮影の延期をお願いいたします。私は劉君に再度手紙を出し、撮影をおこなうか尋ねます。費用がいかほどかをお教え下さい。併せて、劉君に伝えます。様々ご面倒をおかけいたします。敬具 羅振玉再拜 一月十日（新曆では二月二十日）

注

\*この書信は、「非單疏本」の横に圈点、このあとの部分に句点がある。テキストに関する重要な内容であり、恐らく蘇峯に依るものと思われる。

(1) 湖南博士 この時期より後だが、湖南には「宋版礼記正義に就

いて」（一九二七年四月『書物礼賛』。のち『目録書譚』。また『全集』十二）がある。

## 第12信（11信）

消印（大正） 7年2月19日 京都

（大正） 7年2月20日 青山

東京市青山南町六之三

徳富猪一郎殿

台啓

正月初九日賀

羅叔言

蘇峯先生閣下 兩奉

手教、足利學校所藏宋本《禮記》單疏、已荷

鼎力紹介、荷足利君承諾、從此孤本得傳人間。罔非

先生及足利君之賜、感謝何可言喻、寫真事、擬用

中版（カビネ）横照。每書一紙、用中版一枚。不知共用中版幾

何、並擬即求

代覓誠實可信之寫真師、一往調査。須費用若干。乞

示知、以便匯奉。並乞曬（焼付）一分、与琉璃版同寄（舎下）

以便轉寄劉君。一切費

神、統容泥首、足利君函附繳。專此肅謝、敬請

台安。〔弟〕振玉再拜 正月九日

足利君均此致謝、不另

照費。候

示到即匯奉。又啓。

蘇峯先生 二通のお手紙をいただきました。足利学校所藏宋版『礼記』單疏本についてご紹介いただいたばかりか、足利君の承諾もいただきました。これにより天下の孤本がこの世界に出ることは、先生と足利君のおかげです。感謝は、言葉にできません。写真については、中版（カビネ）を横にし、一紙ごとに、写真一枚としたいです。全部で写真はどれくらいになりますか。また信頼できる誠実なカメラマンを紹介していただき、一度調査に行かせたいですが、どれくらいの費用が必要でしょうか。どうかお教え下さい。また一部を焼き付け（現像）して、琉璃版（コロタイプ）と同じく私宛てにお送り頂きましたら、私より劉君に転送いたします。ご面倒をおかけし、心よりお詫び申し上げます。足利氏への手紙を同封いたします。ここに御礼を申し上げます。敬具 羅振玉 正月9日（新暦では二月十九日）  
足利君にも同じくここに感謝申し上げます。また撮影の費用について、お示しをいただきましたら、直ちにお送り致します。追伸

注

\*この手紙でも、写真の大きさに言及している部分などに、句点がある。

第13信 (第14信)

羅叔言拜緘

消印 (大正) 7年3月30日 京都

(大正) 7年3月31日 青山

東京市赤坂区青山南町六ノ卅

徳富先生 台啓

雪堂■寄 十八日

蘇峯先生閣下 春寒未解、不審

起居何似、至以為念。前承

介紹足利學校所藏宋槧《禮記》影照事、蒙

与足利君商定允諾、至為感謝。遂遣寫真師小

林氏購定玻璃乾版、趨赴東京、又荷

介紹、益深感■(「合集」作泐)。惟該書甫照四分之一、該校遽

命停止。小林氏歸洛面告。「弟」深以為憾。不審尚可与

商影照完畢否。若就此中輟。「弟」無以對劉君、且亦

非足利君贊成之初意也。不揣冒昧、擬仍懇

鼎力一商。不知能

鑒許否。專此奉啓、即請

著安。〔弟〕振玉再拜

二月十八日

内函請

小林忠治君面陳

蘇峯先生道啓

蘇峯先生、春寒の頃、如何お過ごしでしょうか。さて先に紹介の勞

をとっていただいた足利學校所藏宋刻『礼記』の写真撮影の事につい

て、足利君と協議承諾をいただき、感謝いたしております。写真師小

林氏(1)を派遣し、玻璃乾版の購入を決定し、東京に向かうことに

ついてもまた紹介していただき、ますます感謝しております。ところ

がこの書について撮影をはじめて四分の一のところ、足利學校より

突如停止を命じられました(2)。小林氏が京都に戻ってきて直接私

に伝えました。私は深く残念に思っております。この後協議してす

べての撮影を終えることができるでしょうか。もし中断してしまえば、

私は劉君に答えることができませんし、また足利君が賛成して下

さった当初の考えとは異なるでしょう。無礼を省みず、ここにお口添

えをいただき、お許しただけなかないかと思ひます。ここに申し上げま

す。敬具

振玉再拜 二月十八日(新曆では三月三十日)

同封は小林忠治郎君に直接述べてもらいます(3)。

蘇峯先生

羅叔言拜緘

注

(1) 小林忠治。京都在住の写真家小林忠治郎。羅振玉の影印事業を技術面から支えた写真家で、この時期の古典籍のコロタイプ影印は、

多くを彼が請け負った。佐藤進「董康日記に見る小林忠治郎」(『二松』二三 二〇〇九年)に彼が行った影印出版典籍の一覧がある。

(2) 該校遽命停止 足利学校蔵本は、南海潘氏蔵本とともに『影印南宋越刊八行本禮記正義』の書名で二〇一四年北京大学出版社より出版された。その解説によると、一九七〇年代に斯道文庫及び足利学校で写真撮影されただけで、それ以外、そのような事業は行われなかったとされる。なお、王国維『觀堂集林』卷十七史林九に「宋越州本禮記正義跋」がある。これは南海潘氏蔵礼記正義七十卷本の跋文であるが、文中に「日本人所撰七經孟子考文並經籍訪古志、雖載黃跋而未錄銜名、故世無知為越本者……」と足利本について言及している。また王国維から劉承幹への手紙(『王国維全集』)でも「……日本所有宋本禮記正義乃足利學校所藏、山井鼎七經孟子考文所據宋本即是本也……」とある。ただ『全集』はこの手紙の後に、羅振玉の天津の住所を伝えていることを根拠に、一九一九年十二月十八日としている。足利本についての書誌情報が少なかったことが暗示される。

(3) 以下四行、前文とのつながりがよくわからない。この四行分の紙は貼り継がれており、墨色も前文と異なる。内容、墨色から考えると、次に貼り継がれている第14信(第13信)に同封されていたのかも知れない。

#### 第14信(第13信)

\*封筒無し

蘇峯先生有道 前函計達

左右承

介紹足利君事、奉謝不可言喻。茲託寫真師

小林忠治氏趨

前影寫。祈

介紹前往為荷。一切費

神容謝。並請

著安。(弟)振玉再拜 二月二日

蘇峯先生 先の手紙はお側にとどいたかと思えます。足利君にご紹介いただき、感謝にたえません。ここに写真師小林忠治氏に撮影に向かつてもらいます。紹介が先に行くことをお願いいたします。すべてのご面倒どうかお許し下さい。あわせてご自愛をお祈りいたします。羅振玉再拜 二月二日(内容から考えると、新曆一九一八(大正七)年の三月十四日に当たると考える)。

謝辞

前稿にひき続き、貴重な資料の利用をお許しいただいた同志社大学図書館に、感謝を申し上げます。また同大学李長波先生、本講座博士課程王怡然さんに協力をいただきました。御礼を申し上げます。